失語症者向け意思疎通支援者の会話方略の評価

嶋﨑百音 [1]　森田亜由美 [2]　葛西有代 [1]　木山幸子 [1]
[1] 東北大学文学研究科/文学部言語学研究室　[2] 東北大学病院
{shimazaki.mone.s4 , michiyo.kasai.q1}@dc.tohoku.ac.jp
{ayumi.morita.e1 , skiyama}@tohoku.ac.jp

概要

本研究では、失語症者向け意思疎通支援者（以下支援者）と実践経験豊富な言語聴覚士（以下 ST）が使用する会話方略を比較し、新たに活動を始める支援者や訓練未経験者が習得しにくい会話態度・技術について検討した。支援者と ST のそれぞれが失語症のある方と対面で会話をする様子を録画し、それを成人の日本語母語話者 24 名が視聴し、Measure of Skill in Supported Conversation (MSSC)[1] に基づき評価した。分析の結果、ほぼ全ての項目で ST の方が支援者より有意に高い得点を得ていた。特に「矛盾する反応への確認」の方略に顕著な差が見られた。支援者は ST に比べ、選択肢や Yes/No 質問を活用できず、同じ質問を繰り返す場面があった。言語・非言語手段を用いた「確認」を取り入れることで、認識のずれを防ぎ、会話の満足度向上が期待される。

1. はじめに

現在、日本には約 50 万人の失語症者がいるとされ、これまでの失語症者支援は主に ST が担ってきた。しかし、近年では身体的機能だけでなく、活動、参加、環境因子、個人因子の側面も重視されるようになり、失語症者が有意義な生活を送るためには、ST だけでなく周囲の支援が必要とされている[2]。これに伴い、各地域では支援者の養成と活動が広がっているが、失語症者との会話方略を評価する標準化された指標は、未だ日本には存在していない。本研究では、失語症者との会話における対話者の方略を評価する尺度として、英語圏で標準化されている Measure of Skill in Supported Conversation (MSSC) の日本語版を作成し、支援者と実践経験豊富な ST の失語症者との会話方略にはどのような差が生まれるのかを検討した。先行研究では、独自の評価法を用いて ST と失語症会話パートナーの会話方略を比較した結果、具体的な技術面で、会話パートナーは ST より低いことが報告されている[3]。本研究でも、態度面より会話技術面の項目で支援者の得点が ST より低くなると予測した。

2. 方法

2.1 参加者

1) 失語症者：発症から 5 年以上経過した慢性期の失語症者 6 名（うち男性 4 名、平均 56.0 ± 12.5 歳）。失語症重症度（BDAE[4][5]による判定）は 1 名が重度、2 名が中等度、3 名が軽度であった。
2) 支援者：宮城県言語聴覚士会主催の養成講座を受講してから 1～3 年経過した支援者 5 名（全員女性、平均 56.4 ± 2.50 歳）
3) 言語聴覚士：宮城県内の病院で勤務する ST 6 名（うち男性 1 名、平均 43.0 ± 7.16 歳）
4) 評価者：宮城県在住の成人日本語母語話者 24 名（うち男性 12 名、平均 65.6 ± 3.66 歳）

2.2 評価尺度

MSSC は、(A) 失語症者の能力の認識と (B) その能力の表出の 2 つに大別され、(A) 能力の認識は「1.文脈にあった自然な大人の話し方」と「2.相手への配慮」という 2 つの大項目があり、(B) 能力の表出は「1.失語症者が理解していることを確認する」、「2.失語症者が応答する手段を持つ」、「3.検証(失語症者の反応の正確さを自動的に仮定しない)」の 3 つの大項目があり、それぞれ 3~6 の小項目を含み、合計 18 の小項目から成る。これを著者らが日本語訳した(付表参照)。
MSSC の原板は各項目につき 9 段階評定させるものだったが、本研究の評価者にとってより理解しやすいように 5 段階評価に変更して用いた。ただし (B) 能力の表出の技術面の小項目は、まず該当する言動の有無を尋ね、あった場合にさらにその技術を 5 段階で評価させるものであった(当該言動がない場合には 5 段階の評価はしない)。

2.3 手続き

2.3.1　会話収録

This work is licensed by the author(s) under CC BY 4.0
(https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/).

失語症者1名につき、支援者とSTそれぞれ1名ずつ引き合わせ、静かな部屋で約10〜15分の1対1の雑談を行ってもらった。話題は指定しなかったが、話題カード（趣味、旅行など）や補助道具（紙、ペンなど）を用意して随時利用できることを伝え、会話の様子をビデオカメラで記録した。会話終了後、失語症者には会話相手の印象についてのアンケートを実施し、MSSCの評価カテゴリーに基づいて5項目を設け、各々5段階で評定してもらった。

2.3.2 会話評価

評価者らは同一会場に集まり、一斉に収録された会話を視聴しながらMSSC日本語版に沿って支援者及びSTの会話方略について評価を行った。練習動画によって評価法を学習した後、6名の失語症者がそれぞれ支援者/STと行った12会話を視聴し、評価を行った。会話の再生順は、支援者とSTが交互になるようにした。これらの評価作業は、途中休憩を含め、約120分を要した。

2.4 分析

失語症者が会話収録後に行った会話相手の印象評定については、項目ごとにST群との差を対応のある*t*検定で検証した。

評価者らが行ったSTと支援者の会話に対する評価については、各小項目の平均得点について対応のある*t*検定を行った。なお(B) 能力の表出の小項目に示される会話技術の使用の有無については、カイ2乗検定を用いてSTと支援者の差を検討した。

さらに、項目内容によるSTと支援者の差のあり方が異なるかどうかを検討するために、(A) 能力の認識と(B) 能力の表出それぞれにおいて、大項目（A. 能力の認識では2項目、B. 能力の表出では3項目）と会話相手(STと支援者)の平均得点を反復測定2要因分散分析（A. 能力の認識では2×2、B. 能力の表出では3×2）で比較した。以上の分析にはR Version 4.2.1.を用いた。

3. 結果

まず、失語症者が行った会話相手の評価では、STと支援者の間で得点の差は有意ではなかった（図1）。

一方、評価者らの評定の結果では、(A) 能力の認識のうち7項目、(B) 能力の表出のうち8項目でSTが支援者より有意に高い得点を得ていた（図2, 3）。また、(B) 能力の表出の各会話技術の使用頻度について、支援者に比べSTの方が小項目 (18) 矛盾する反応への確認を頻繁に行う傾向が示された ($\chi^2(1) = 4.86, p = .028$)。

次に、2つの評定カテゴリーそれぞれで、大項目に応じた会話相手の差のあり方を分散分析で検証した結果（表1, 2）、(A) 能力の認識では会話相手の有意な主効果が認められ ($F(1, 92) = 4.50, p = .037$) 、支援者はSTより得点が低いことが確認されたが、大項目の主効果 ($F(1, 92) = 1.79, p = .185$) および両要因の交互作用 ($F(1, 92) = 0.02, p = .878$) は有意ではなかった。(B) 能力の表出についても同様に、会話相手要因にのみ有意な主効果が認められ ($F(1, 132) = 13.88, p < .001$)、支援者がSTより有意に得点が低いことが確認された。大項目の主効果 ($F(2, 132) = 0.11, p = .895$) および両要因の交互作用は有意ではなかった ($F(2, 132) = 0.14, p = .873$)。

表1. (A) 能力の認識の大項目と会話相手の2要因比較

	df	*MS*	*F*	*p*	η^2
大項目	1	0.46	1.79	.185	.019
会話相手	1	1.15	4.50	.037	.047
大項目×会話相手	1	0.01	0.02	.878	<.001
残差	92	0.26			

表2. (B) 能力の表出の大項目と会話相手の2要因比較

	df	*MS*	*F*	*p*	η^2
大項目	2	0.04	0.11	.895	.002
会話相手	1	5.00	13.88	< .001	.095
大項目×会話相手	2	0.05	0.14	.873	.002
残差	132	0.36			

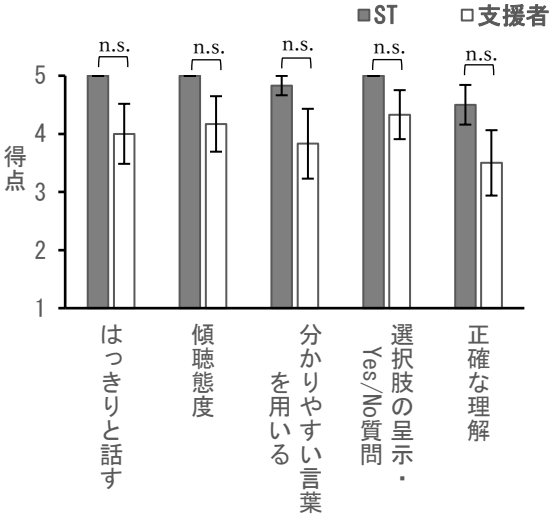
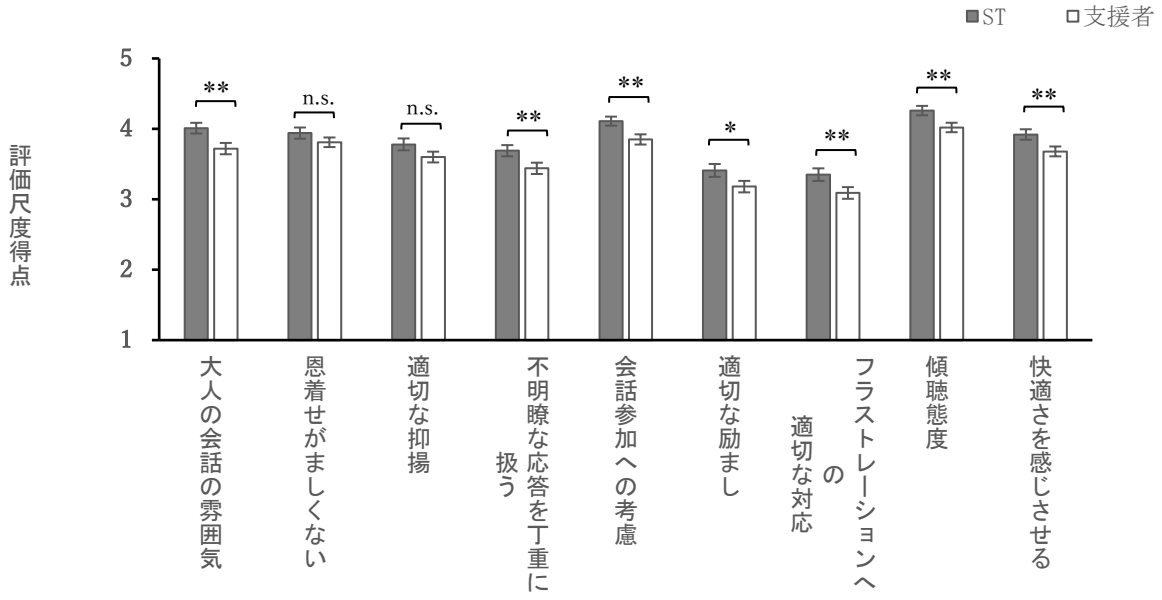


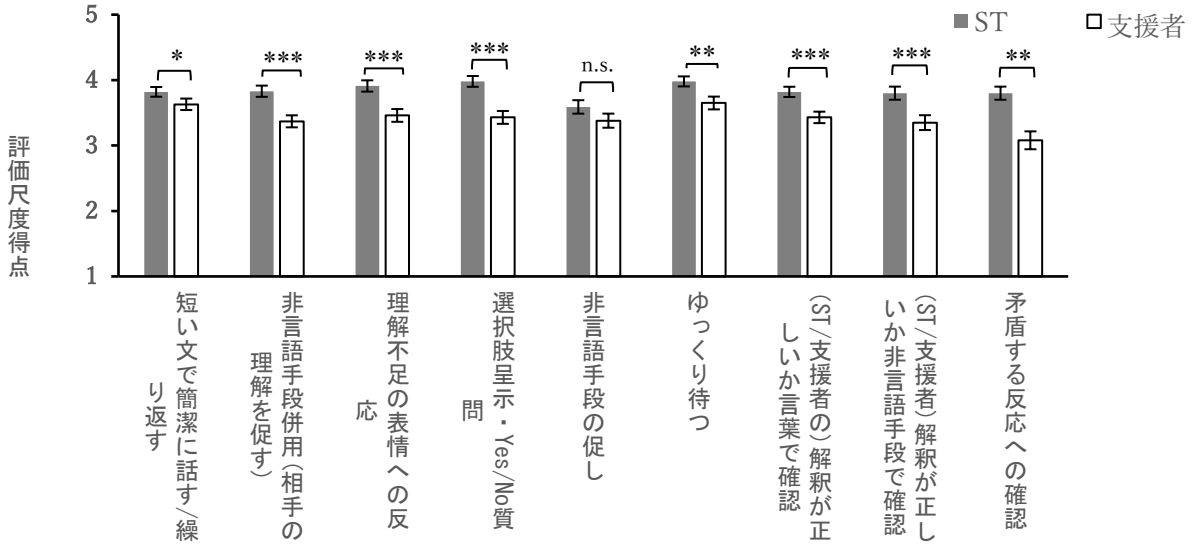
図1. 失語症者による会話相手の評価
注.. 誤差バーは標準誤差を示す。

This work is licensed by the author(s) under CC BY 4.0
(https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/).



* p <.05, ** p <.01, *** p <.001

図 2. 会話相手の (A) 能力の認識における小項目別平均得点



* p <.05, ** p <.01, *** p <.001

図 3. 会話相手の (B) 能力の表出における小項目別平均得点

4. 考察

4.1 ST と支援者の会話方略について

失語症者自身による会話相手の評定結果では、5 項目中 3 項目(「はっきりと話す」「傾聴態度」「選択肢の呈示・Yes/No 質問」)で ST が満点を得ており、他の 2 項目(「分かりやすい言葉を用いる」「正確な理解」)でも高得点を獲得していた。ST の会話態度や技術が、失語症のある方との日常会話においても目指すべきものであることが再確認された。しかし、ST と支援者の間に有意な差はなく、支援者が ST に比べ低く評価されている

This work is licensed by the author(s) under CC BY 4.0
(https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/).

わけではない。概ねいずれの会話相手とも和やかに会話を続けており、支援者の高い共感性や養成講座での学びが影響していると考えられる。

一方、評価者らによる評価の結果は、先行研究[3]とは異なり、会話態度・会話技術両面でSTと支援者の間に有意な得点差が示された。この違いは、会話の状況の違いに起因すると考えられる。先行研究では、特定の限定された話題に基づいた会話評価が行われたため、会話態度に関する評価項目の分析対象が少なくなっていたが、本研究では話題を限定せず雑談をしていたため、会話態度の評価をより細かく行うことができたと言える。

個別の技術では、「矛盾する反応への確認」の技術に関して、支援者はSTのように頻繁に取り入れることができておらず、また取り入れていた場合にも評価得点が比較的低くなる傾向があった。この点の技術を特に強化することで、互いの認識のずれを防ぎ、失語症者が感じた「伝わっていない」という不安を解消できると考えられる。今後の支援事業拡大に伴い、こうした会話技術を意識し、継続的に実践していくことが重要である。

4.2 評価方法について

本研究では、MSSCを基に日本語版MSSCを作成し、評価表には小項目とともに細分化された評価過程を示した。しかし、(B) 能力の表出では評価者らから判断の難しさの訴えがあり、会話動画の評価技術の短時間での習得の課題が残った。評価方法の改善として、評価者訓練や具体例の追加が求められる。また、MSSCの (A) 能力の認識のうち中項目3「感情のトーン/ユーモアの適切な使用」（付録）について、その具体的な小項目3としては今回はトーンの適切さのみを尋ねた。ユーモアの適切な取り入れ方やその評価指標の作成も、今後の課題と考えられる。

4.3 結語

失語症者への会話支援は、失語症者のコミュニケーションの幅を広げ、社会参加を促進する重要な役割を持つ。支援者の養成活動及び、修了生の支援活動が進み、失語症者がより多くの人々と気兼ねなく話せる環境を作っていくことが、失語症者支援の目指すべき姿であると考える。

表3 評価者らによる会話相手の項目別評価平均得点（標準偏差）とST・支援者間の比較結果

評定カテゴリー	大項目	小項目	ST 平均 (SD)	支援者 平均 (SD)	*t*	*df*	*p*
(A) 能力の認識	1.文脈に合った自然な大人の話し方	1	4.01 (0.91)	3.72 (0.96)	3.31	143	.001
		2	3.94 (0.95)	3.81 (0.82)	1.74	143	.084
		3	3.78 (1.00)	3.60 (0.92)	1.83	142	.069
	2.相手への配慮	4	3.69 (0.94)	3.44 (0.94)	2.79	132	.006
		5	4.11 (0.76)	3.85 (0.87)	3.29	143	.001
		6	3.41 (1.09)	3.18 (0.97)	2.28	140	.024
		7	3.35 (1.06)	3.09 (0.97)	3.24	136	.002
		8	4.26 (0.80)	4.02 (0.80)	3.35	143	.001
		9	3.92 (0.89)	3.68 (0.84)	2.70	143	.008
(B) 能力の表出	1.失語症者が理解していることを確認する	10	3.82 (0.82)	3.63 (0.94)	2.29	104	.024
		11	3.83 (0.92)	3.37 (0.97)	3.70	95	<.001
		12	3.91 (0.87)	3.46 (0.96)	3.82	82	<.001
	2.失語症者が応答する手段を持つようにする	13	3.98 (0.84)	3.43 (0.96)	3.44	82	<.001
		14	3.59 (0.95)	3.38 (0.94)	0.60	59	.552
		15	3.98 (0.84)	3.65 (1.02)	3.27	104	.001
	3.検証（失語症者の反応の正確さを自動的に仮定しない）	16	3.82 (0.82)	3.43 (0.89)	4.53	93	<.001
		17	3.80 (0.98)	3.35 (1.06)	3.82	73	<.001
		18	3.80 (0.83)	3.08 (0.97)	3.38	44	.002

This work is licensed by the author(s) under CC BY 4.0
(https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/).

謝辞

本研究は科学研究費基盤研究（B）24K00059 の助成を受けて実施した。本研究の遂行にあたり、実験参加者の皆様には会話収録、会話評価に快く協力して戴いた。ここに感謝の意を表する。

参考文献

[1] Kagan, A., Winckel, J., Black, S., Duchan, F. J., Simmons-Mackie, N., and Square, P. (2004). A set of Observational Measures for Rating Support and Participation in Conversation between adults with aphasia and their conversation partners. *Topics of Stroke Rehabilitation 11*(1),67-83.

[2] 竹中 啓介・吉野 眞理子 (2018). 失語のある人との会話における対話者の会話態度と会話技術を評価するための観察評定尺度の開発および信頼性と妥当性の検討 コミュニケーション障害学,35(2),55-63.

[3] 鈴木 朋子 (2013). 失語症会話パートナーへの会話支援 -失語症者との会話に対する質的評価の試み- 健康医療科学研究,3,9-23.

[4] Goodglass, H. and Kaplan, E. (1972). Assessment of Aphasia and Related Disorders. Philadelphia, Lea & Febiger.

[5]波多野 和夫・中村 光・道関 京子・横張 琴子 (2002). 「言語聴覚士のための失語症学」医歯薬出版株式会社, 233

This work is licensed by the author(s) under CC BY 4.0
(https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/).

付録

付表　MSSC 日本語訳版

評定カテゴリー	大項目	中項目	小項目
(A) 能力の認識	1. 文脈に合った自然な大人の話し方	・文脈に適した自然な大人の会話の感触と流れ	1. 状況に適した自然な大人の会話の雰囲気と流れがある
		・恩着せがましくない (声の大きさ、声のトーン、速度、発音)	2. 「声の大きさ、高さ、速度、発音」が恩着せがましくない/威張った感じではない
		・感情のトーン/ユーモアの適切な使用	3. 適切な抑揚をつけて話している
	2. 相手への配慮	・間違った/不明瞭な応答は丁重に扱う	4. 失語症のある方の間違った/不明瞭な応答を丁重に扱っている
		・失語症者が会話に参加しようとしていることに配慮する	5. 失語症のある方が会話に参加しようとしていることに配慮している
		・適切な時に励ます	6. 適切なタイミングで失語症のある方を励ましている
		・失語症者がイライラしたり、動揺している時に、能力を認める	7. 失語症のある方がイライラしたり、動揺している時には、その能力を受け入れ、対応している
		・聴く態度	8. 失語症のある方の話に丁寧に耳を傾け、真摯な姿勢で聴いている
		・失語症者が快適に感じられるようにする	9. 失語症のある方が快適に感じるように工夫している
(B) 能力の表出	1. 失語症者が理解していることを確認する (例：話題、質問)	・言語的 (例：短く簡単な文章；冗長性；言語的な適応があるか)	10. 失語症のある方に合わせて、適宜短く簡単な文にしたり、同じ言葉を繰り返したりして、理解の確認をしている
		・非言語的 (ジェスチャー、書字、リソース、描画)	11. 非言語的手段(例：ジェスチャー、書字、実物やカレンダー・地図等、描写)を用いて話し、話の強調や明確化を図っている
		・コミュニケーションの合図への反応 (理解不足を示す表情への反応など)	12. 失語症のある方の理解不足を示す表情に対し、うやむやにせず、反応している
	2. 失語症者が応答する手段を持つようにする	・言語的 (例：固定選択肢やはい/いいえ質問の使用)	13. 選択肢を呈示したり、Yse/No で答える質問をしている
		・非言語的 (ジェスチャー、書字、リソース、描画)	14. 失語症のある方に非言語的手段を用いるよう促している
		・コミュニケーションの合図に対する応答 (例：応答するのに十分な時間を与える)	15. 失語症のある方が応答するのに十分な時間を与えている
	3. 検証 (失語症者の反応の正確さを自動的に仮定しない)	・言語的　言葉による確認 (例：「では、私の考えが正しいか見てみましょう。」)	16. 自身の解釈が正しいかどうか、言葉で確認している
		・非言語的 (ジェスチャー、書字、リソース、描画)	17. 非言語的手段を用いて、自身の解釈が正しいか確かめている
		・コミュニケーションの合図に対する応答 (例：はい/いいえの矛盾する応答への適切な対応)	18. 失語症のある方の矛盾する「はい・いいえ」の応答に対し、言語的・非言語的手段を用いて確認をしている

This work is licensed by the author(s) under CC BY 4.0
(https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/).